

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 149号

平成26年9月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三先生の文章より (11)

(「石館守三先生金曜会語録」より (7))

devotion 愛の行為が必要

医療問題に取り組んでいる。医学薬学の進歩が人間の寿命を延ばした。科学の進歩を社会に応用しようとするとき、本当に devotion (愛の行為) がなければいけない。単に制度だけいじっても駄目である。医療は算術で行なっている。制度をいじってもまた穴だらけである。

生命の福祉と健康の福祉とは何にも代えることが出来ないか、ここに限界が存在する。医療の経済と医学の応用が衝突する。科学技術の進歩の裏では経済に苦しめられる。進歩進歩では全ては解決しない。成長には制御を含む。進歩は廃退を生む。科学それ自身の進歩は盲目である。科学進歩を制御するものは愛から出た制度である。

どんな制度を使ってみても愛がなければ何の役にも立たない。愛がなければそれは進歩いるかのごとく見えても破滅に通じる。奉仕の精神のない仕事は意味を持たない。全てこの世における問題は、devotion 愛の行為なければ完成しない。日本の社会には倫理性が欠けている。利害の衝突は解決がつかない。Devotion の精神に生きがいを求める。キリストは人生の原理を私達に示してくれているのである。

(昭和 46 年 12 月 10 日 金曜会)

Community を通して学ぶ

同志会というものの意味。community (共同体) を体験する。一つの理想を持ち一方思い思いの心を持つ同世代の人間が互いに語り合う。理想をぶつけ合う。自分の人生も大切だが、人の人生も大切だと知る。これは community を通してしか学び得ないことである。視野の広さがこうした中から培われるようになろう。専門的な知識に秀でていてもそれのみでは人生に通用しない。人間的土台のないところにある専門的知識は生かされない。

人間とはいかなるものか。人間の終局的な理想。これは聖書を通じキリストという人間像が与えられているわけだからそれを探求する他ない。キリストは我々人類に何を語って来たか、これを知るとき諸君は最上の学生生活を送れるのではなかろうか。

社会に出て我々は我々の人生観を試す。誘惑、困難な荷物がある。クリスチャンはクリスチャンのとしてのみかたまってはならぬ。これが伝道である。

以上が私の人生であったように思う。人は神の聖を受け得る存在である。我々肉体は土くれであるが。復活、新しき人生、最近身近に感じられるように思われる。 (昭和 47 年 4 月 14 日 金曜会)

人との出会い

人との出会いが人生に大きな影響。自分がその出会いをいかに受け止めたかが必要である。自分が大学でやった受験勉強が大きな意味を持つかは疑問。伝道の書「汝の若き日に造り主を覚えよ」盛んなりし事業家、成功者がいかに希望を失い、おろおろする人がいかに多いか。

(昭和 47 年 9 月 22 日 金曜会)

小西先生との出会い

同志会史を書いていて感じたこと。同志会の綱領の精神は素晴らしいことを今新たに感じる。阪井会長の夢の具現である。先生は立教出身だが、“東大の学生”を特に対象となさったのは、国の将来を担うのは東大の学生であるとして限定した。先見の明があった。

同志会での先輩と後輩の出会いは諸君に大きな収穫をもたらす。自分の小西先生との出会いはまさに印象的であった。先生は聖書にへばりつき議論などせずにひたすら一途に求めていた。先生に奥さんの死を機会に伝道の道へ入るようにすすめた。戦後先生が訪ねてきた時のことである。自分でやりたかったが出来なかったからも半分ある。キリストの義と愛なくして社会の発展はない。だからこそ将来を担う東大生に限定した。

(昭和 47 年 9 月 29 日 金曜会)

母

兄弟、男 6 人、女 2 人、私にはあった。自分でも私がキリスト教を受け入れたのは不思議。兄弟のうち信仰を与えられたのは、私の他もう一人。どうしてこうなったのか。強いていうなら先生もあつたが、父が明治学院に行って、キリスト信者ではなかったが、キリスト教に理解を持っていた。父は仏教徒であり、母方の祖父は仏教僧であった。信仰的生き方が私に影響を持ったのではないかと思う。つまり仏の慈悲、困った人が訪ねてくればこれをもてなす。困った子供がいれば飛んで行って助けていた。

これは仏の慈悲によって自分は生きているのだというので、こうした生活をしていたのであろう。私の兄は母に非常に苦勞をかけていた。放浪の旅、この兄のために母は全霊を尽して手を合わせていた。小学校もろくに出ていない母がどうしてああしたことが出来るのか。信仰から出ている。知識でない。本当に人間の価値を信仰から教えられたのであろう。信仰は知識ではないと知らされる。

(昭和 47 年 10 月 13 日 10 月 13 日 金曜会 署名式)

人生の価値、人格の尊厳

一人の身体障害者を持った一人の母の日記を読む。最近も寝たきりの37歳の障害者を看病に疲れた父が殺したとの記事を読む。この日記では、2年も3年も話さぬ子、この子を神から賜った者として自ら大切に育てるのが私の使命だと医者の間を走り回った後、思ったそうである。彼女は精薄者の母の会を組織したそうである。神からの苦い盃を受け、人生の深い価値を知ることが大切。

皆さんも将来いろいろなものを求めて世を渡るであろう。その中で何が本物であるかは聖書に示されている。それに帰って欲しい。私の友人でいい業績を上げた学者が、年をとってから何を自分がやったのかと考え行き詰まり、あわれな精神状態になる人が多い。人生の価値、人生の尊厳、これが今日教えられていない。文化文明が進んでも、極端に言えばお互いに便宜上の問題であって、人間の尊厳にかかわる問題ではない。神の我々に求めたまうものは2千年前キリストにより示されていることである。

(昭和47年10月13日 金曜会 署名式)

元旦の歌

今年が6回目の私の年である。(1901年1月14日生まれ、翌々日が72歳の誕生日)

元旦の歌

「今日、明日と書いて 流るる 千歳川 いつか七十路 越えにけるかも」 永遠の流れをもっと大切にすべきである。

「うぐいすの 声なかりせば 雪とけぬ 山里いかで 春を知るまじ」 全力をつくし独自の道で与えられた学問を学ぶよう努力せよ。

(昭和48年1月12日 金曜会)

召命はいつかある

〇兄の話は感銘深かった。K兄のさっきの話に関して、K兄の父上より手紙が昨夜届いた。私はそのためにやって来たのでもある。手紙では「同志会に置いて頂き卒業と言うことになった。まだ就職は決まっていないようである。あまり話をしてくれない。息子は福祉事業に勤めたいということであるが、〔私は〕絶対反対である。」というもの。

K兄の話をもっと詳しく聞きたいと思って今日はやってきた。福祉事業につきたいとの話がK兄より以前あった。「学校で学んだことを生かせる形で生かせる形で受け入れ態勢の整っている場所に行くように。福祉事業に入ることはそれはそれでよいこと。」

福祉事業と言ってもピンからキリまである。名誉栄達を求めないという君の生き方に私は全面的に支持をする。君の父上の考えもそれまで学問がないために辛酸をなめて来た、こうした経験をさせたくないとの気持ちがあるのかもしれない。この世において名をなす、相当の地位を得るとは、いい職についたとか学校を出たからというわけではない。役人になって東大を出て名誉栄達の道を求めるわけではない。歩めるであろうと思っていた人々の多くはかえってそう

いう気持ちのために社会に害を流し、自らも失敗していった。

父上が立派な人間になることを求めるのなら、大会社、官吏になることでなく、自分の使命を開墾すること。情熱を捧げる仕事を見つけたということが必要な条件ではなかろうか。そうした方向で話を勧めてみれば。

福祉とは孤児、病人を世話することではない。君の talent (才能) の問題でもある。君の中で福祉の道を歩むのが神の喜ぶ道、役人、サラリーマンとなるのが非クリスチャン的であるというなら、これは君が改めねばならぬ。役人、サラリーマンもその姿勢が問われ、クリスチャン的でありうる。また必ず召命はいつかある。

私は薬屋のせがれであった。薬は悩みを持つ人に喜びを与える職業であったから、私はこの手伝いに喜びを感じていた。中学4年の時ライ病院に薬を届けた。この時初めてライ病患者を見た。非常にショックを受けた。この時のライ病看護は病人を隔離し彼らを死滅させるという方向をとった。この時ライ病患者の薬を発見したいと思った。

東大薬学部で薬学の研究。時に気になってはライ病患者を訪ねたこともあった。研究生を卒業してライを研究させてくれと親父にい

うとフムフムというだけ。家内はキョトンとしていた。恩師に相談するとまだ早い、君の力ではと一喝された。この時の思いには青年の感傷もあったろう。私は結局残った。研究を続けた。ライとは別の分野の研究に進んだ。

しかしこの時のことは無駄ではなかった。戦争中にライ病に効果的な薬（プロミン）が出来たとの雑誌があった。この記事が目にとまり日本で初めて合成。ライ病の関係者の間で大騒ぎに。ここで「目にとまった」というのは、若き日の思いが今に芽を出したものの。

親が反対しても、役人になるのも、一つの手。ここで力を養うことによりかえって今福祉に飛び込むより十倍の実を結ぶということになるのかも知れない。福祉に進むことのみがクリスチャン的というのは、君を責めるわけではないが反省が必要。時が来る。私はこう思うとの意見である。

(昭和 48 年 1 月 26 日 金曜日)